

東北東京間連系線のマージン設定値の訂正について

2017年 7月 4日

空白

- 東北東京間連系線のマージンについては、2017年4月1日分以降、
 - ・ 翌々日の空容量の算出・公表時に連系線潮流抑制のためのマージンは原則開放する。
 - ・ 但し、広域機関及び関係一般送配電事業者が台風・暴風雪・雷等の予見可能なリスクが高まっていると判断した場合はマージンを設定することとしている。

| | 前々日 翌々日空容量 算出・公表 (15時) | ①前日スポット 取引断面 (10時頃) 前日 | 当日 ②3~6時間 ~実需給断面 |
|-----|----------------------------------|------------------------------|---|
| 雷 | マージン開放 | | 雷注意報発表 3~6時間前 約720時間/年 空き容量の範囲で マージン再設定 |
| 台風 | 暴風域に入る可能性あり 72時間前 マージン開放なし | 約50時間/年 | |
| 暴風雪 | 気象情報発表 1~3日前 マージン開放なし | 約250時間/年 | |

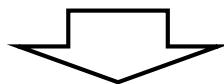
合計
約300時間/年

合計
約1,020時間/年

2. マージン設定値の考え方

【これまで】

- 従来のマージン設定値については、
 - ・ 電源脱落量が最大となるユニット送電のA線を選定
 - ・ A線に接続されるA発電所は、高効率LNG火力のみで構成されており、年間を通じて高出力で運転していることから、東北と東京エリアの系統容量比による電源脱落量の1/5に相当する量（一律45万kW）を設定していた。
- 2017年6月末には、A線のユニット送電が解消したことから、一律45万kWとする運用を7月1日以降見直していたが、発電機の運用について誤って考慮していたことから設定値を訂正する。



【2017年7月5日以降】

- 7月1日以降の見直しの考え方を継続
⇒ 「発電機の並解列状況」や「LNG火力の外気温の影響」等を考慮して運用する。
最大電源脱落量が大きいユニット送電線から算出される「42万kW、38万kW、35万kW、33万kWの値」を加えて、次の「マージン設定フロー」に従い設定することとする。

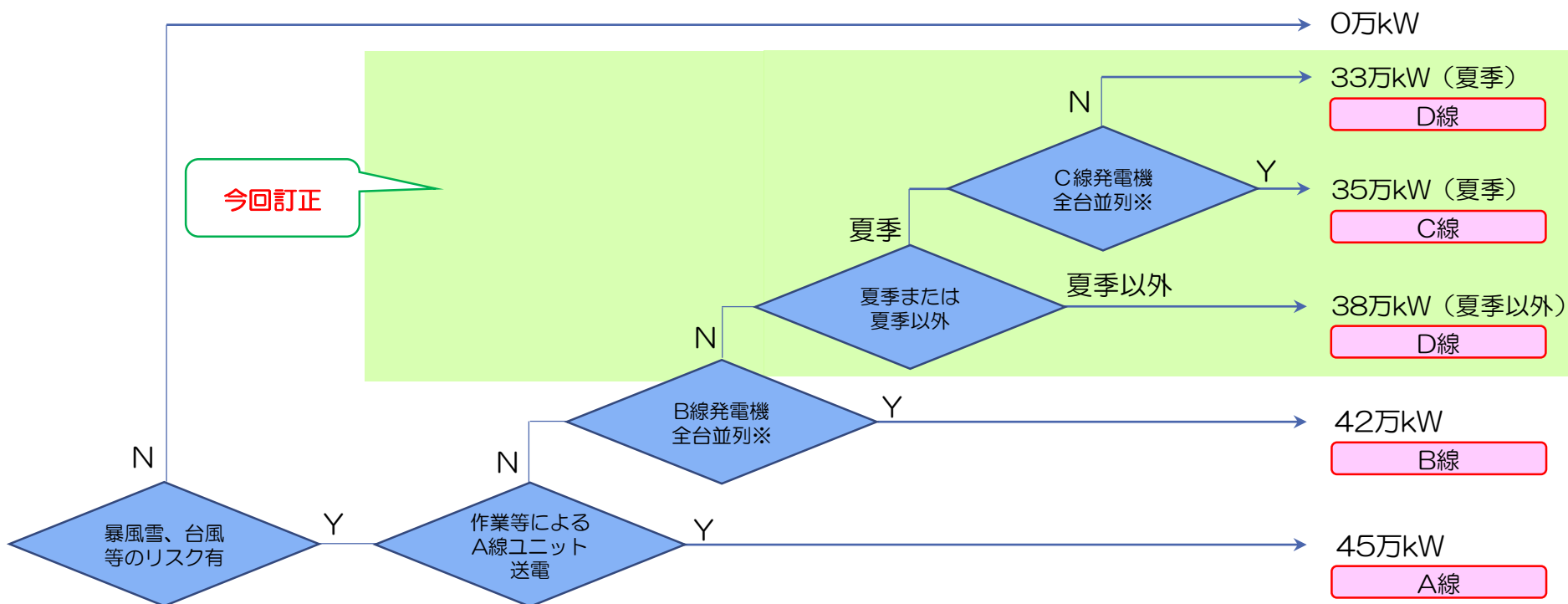
3. マージン設定フロー（7月5日以降）

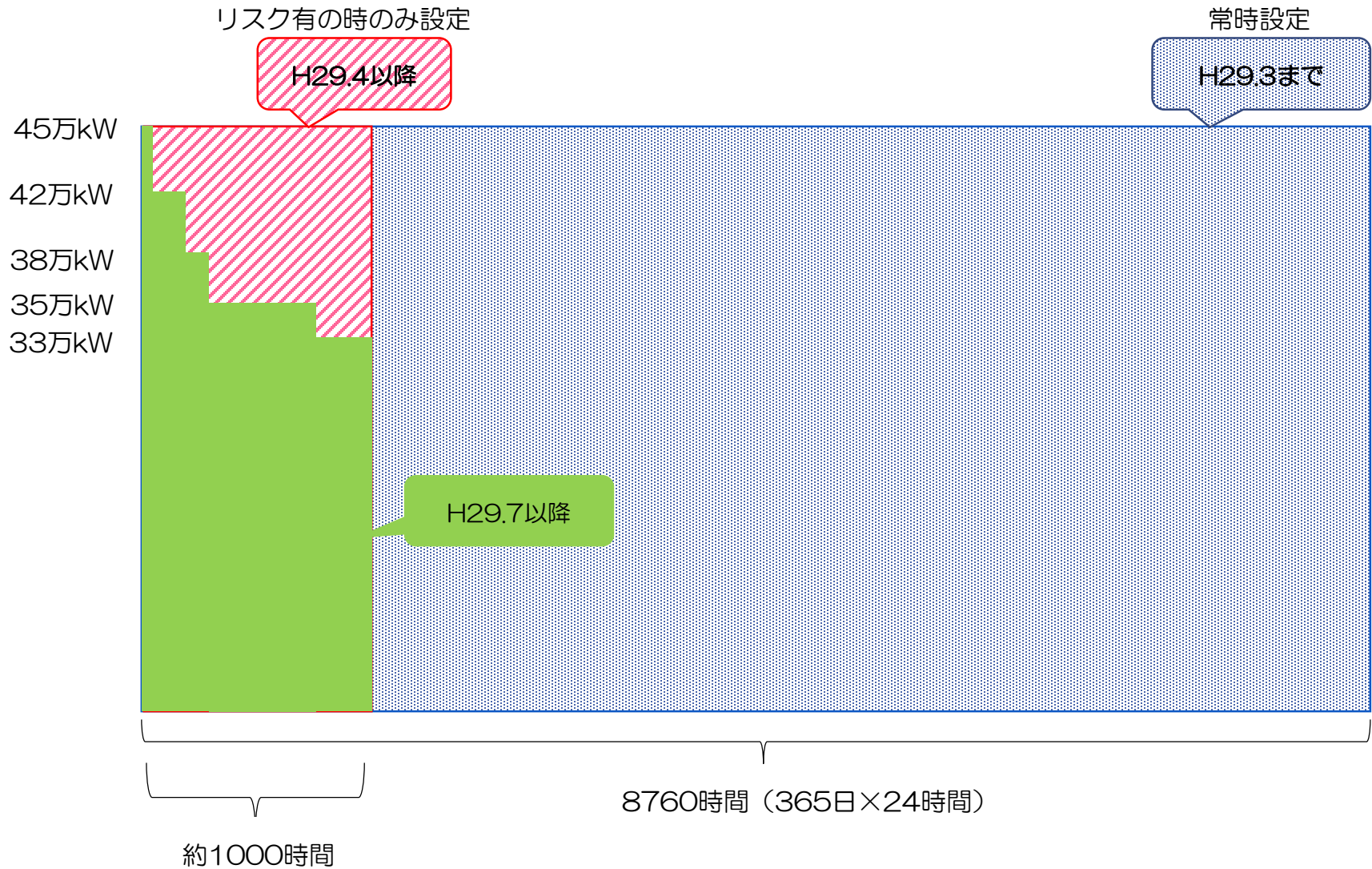
- リスクが顕在化している場合（暴風雪、台風等のリスクあり）で、以下の順序によりマージンを設定する。
- ① 作業等によりA線がユニット送電となる場合は、45万kW
 - ② B線の発電機全台並列の場合※は、42万kW
 - ③ 夏季以外の場合は、38万kW（夏季以外）
 - ④ 夏季でC線の発電機全台並列の場合※は、35万kW（夏季）
 - ⑤ 上記①～④以外の場合は、33万kW（夏季）

マージン設定フロー

- ・ 翌々日マージン要否判断（毎日13時頃）
- ・ 翌々日マージン開放後の再設定要否判断（都度）

注）夏季とは7/1～9/14を指す



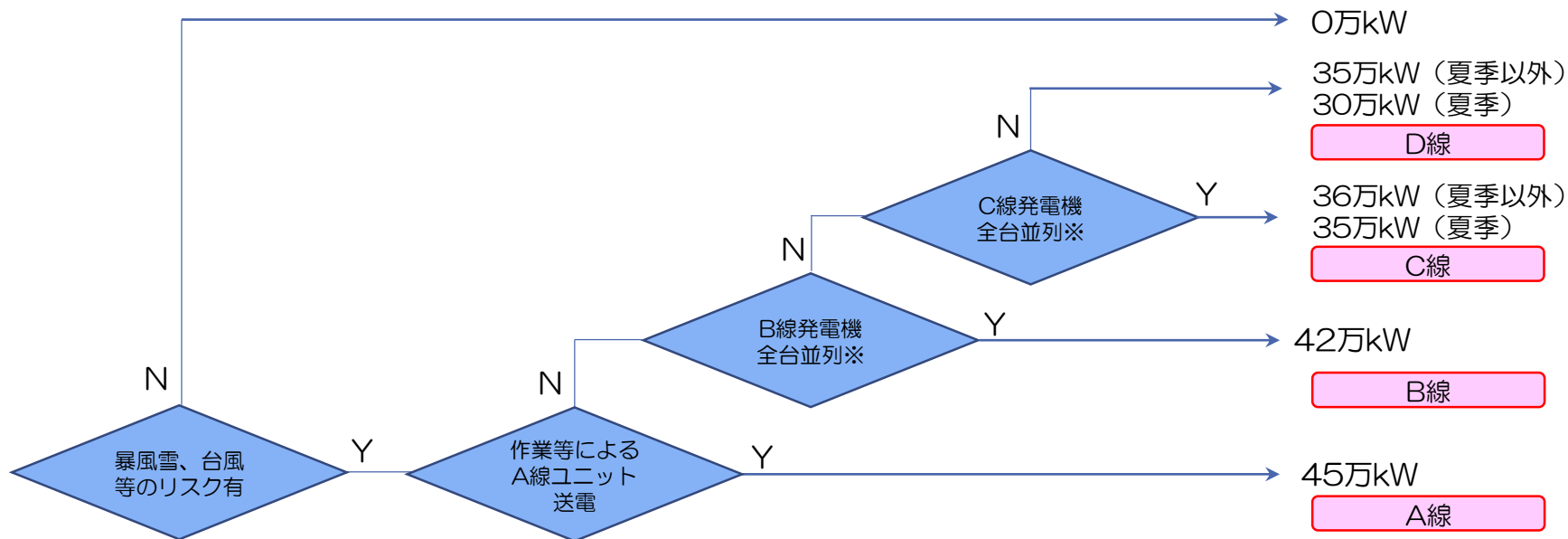


- リスクが顕在化している場合（暴風雪、台風等のリスクあり）で、
 - ① 作業等によりA線がユニット送電となる場合は、45万kW
 - ② B線の発電機全台並列の場合※は、42万kW
 - ③ C線の発電機全台並列の場合※は、36万kW（夏季以外）、35万kW（夏季）
 - ④ 上記①～③以外の場合は、35万kW（夏季以外）、30万kW（夏季）

注) 夏季とは7/1～9/14を指す

マージン設定フロー

- 翌々日マージン要否判断（毎日13時頃）
- 翌々日マージン開放後の再設定要否判断（都度）



※ 翌々日マージン要否判断時においては、定期検査等で停止が明らかなユニットがない場合は全台並列と見なす。